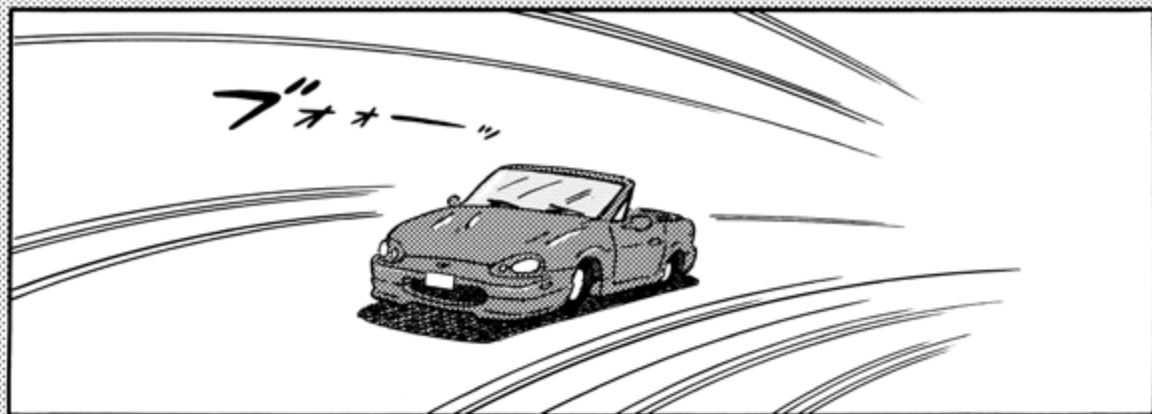


★ 操 作 方 法 ★

マンガのページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

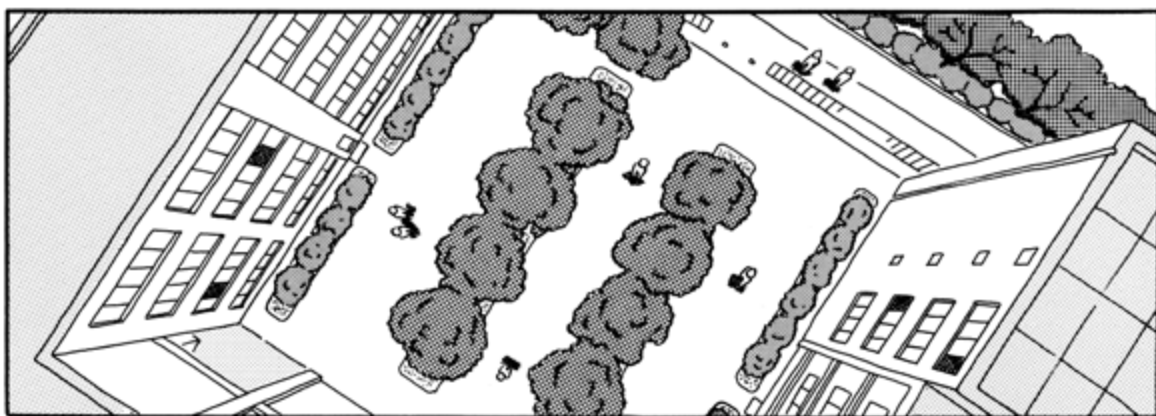
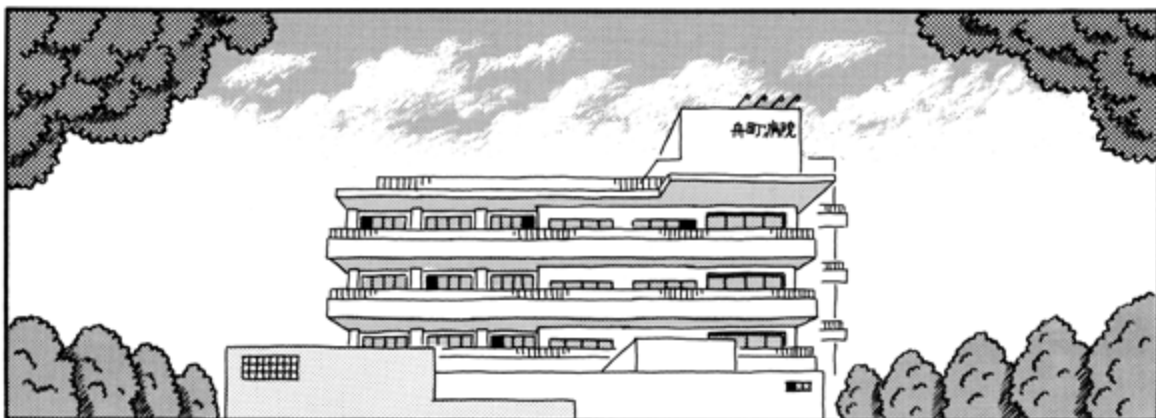




車椅子の女

—くるまいずのおんな—

福田達雄





男「卒業してから
十年近くなるかなア。」

女「天野あんだ

アタシの事

好きだったでしょ
知ってたわよ。」

男「えっ…ああ
(変わってねえな)」

女「アタシ…。」

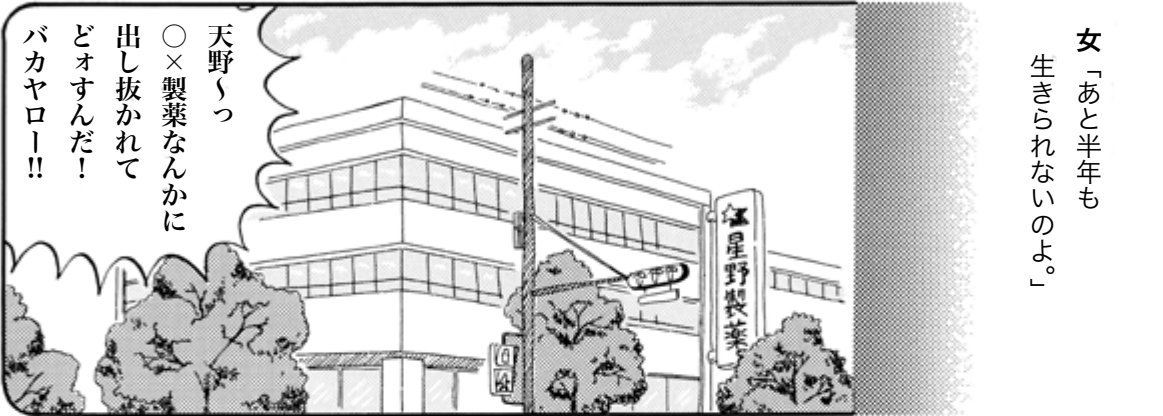
男「ん!？」

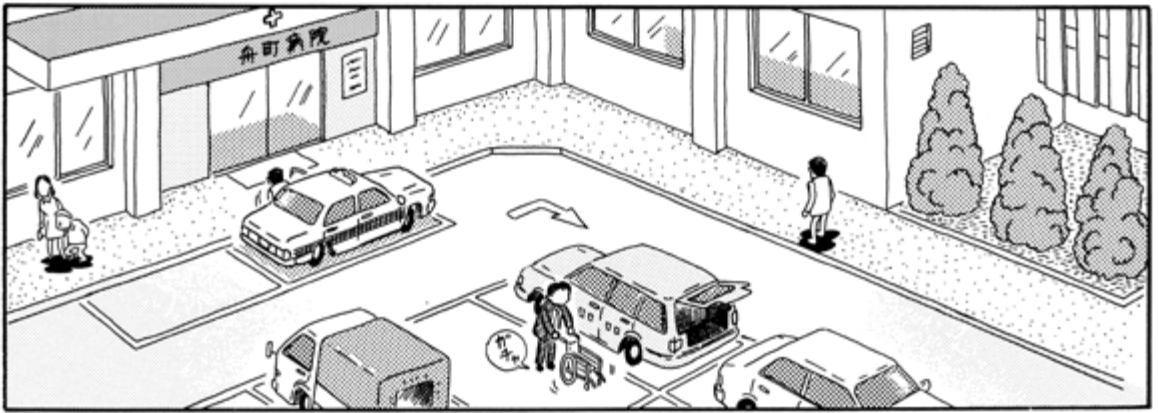
アタシ…
死ぬの。

ええっ!?

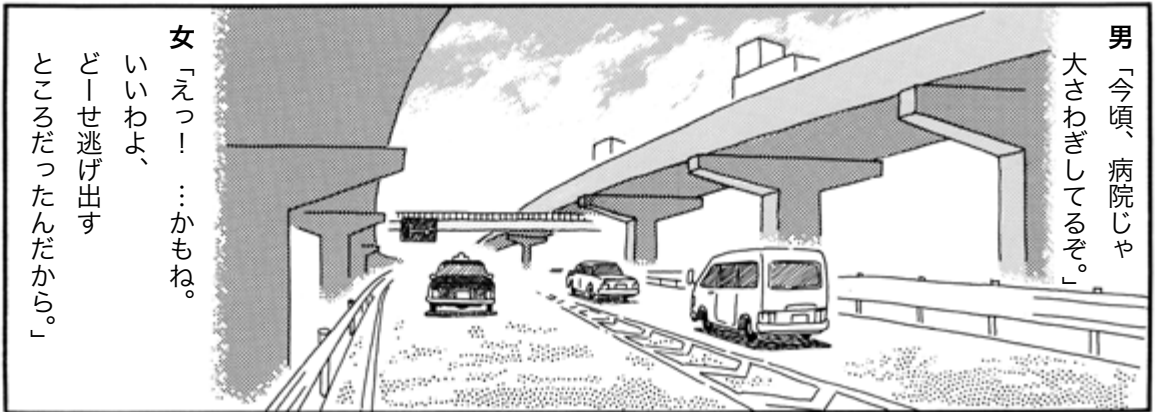
アタシのこと
まだ好き?

も、
もちろん
好きだよ。





男「今頃、病院じゃ
大きすぎしてるぞ。」



女「えっ！ …かもね。
いいわよ、
どーせ逃げ出す
ところだったんだから。」



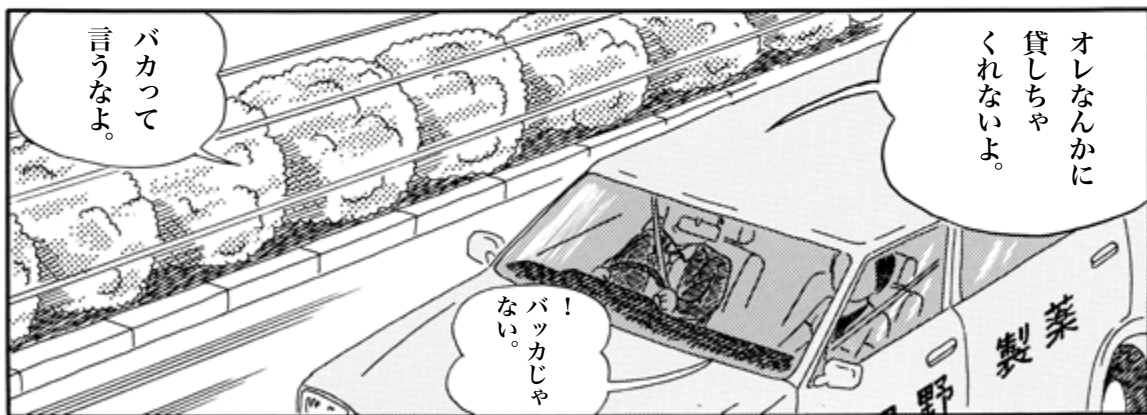
男「……………」

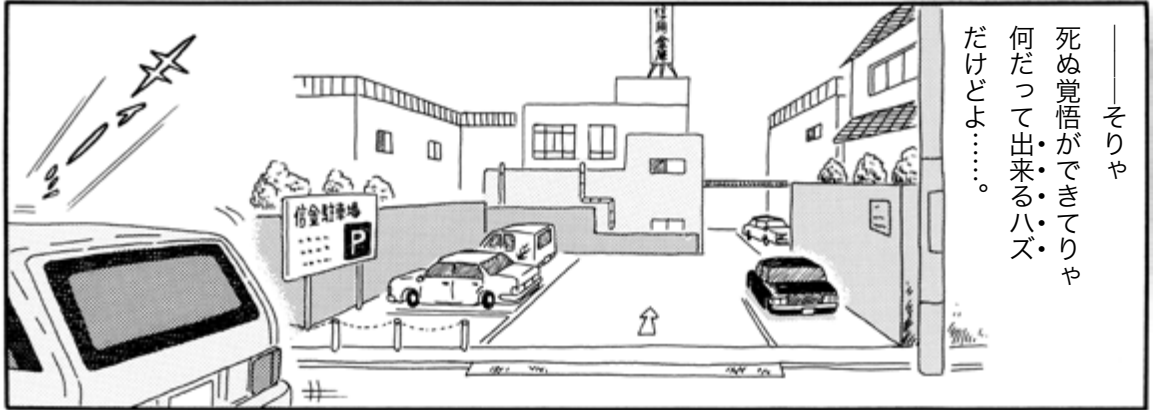
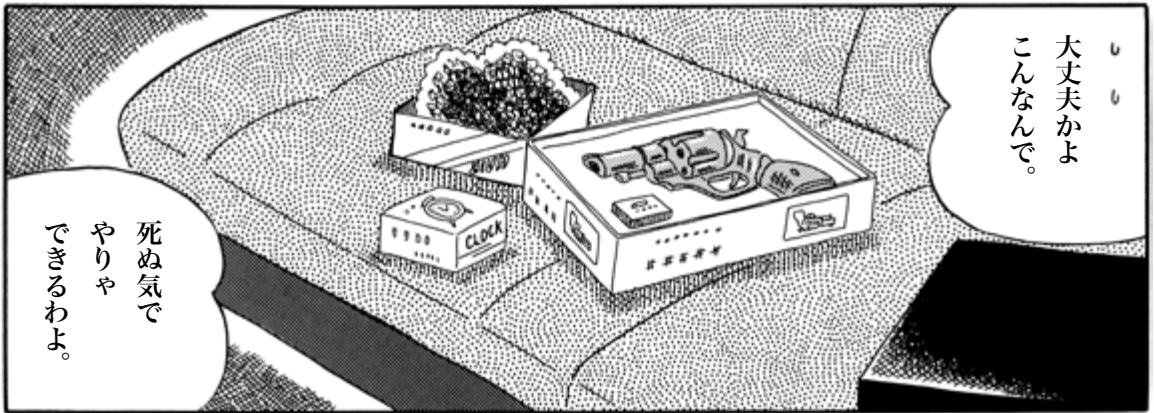
女「後悔してるんじゃない？」



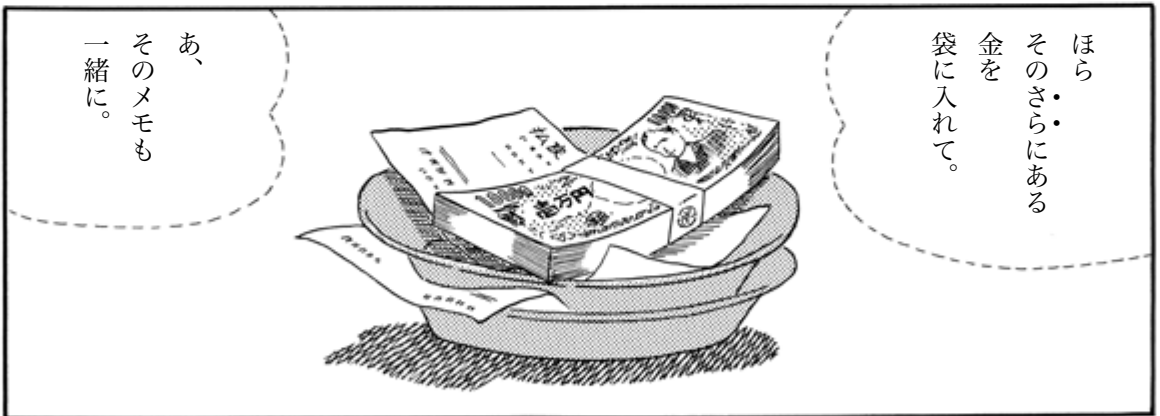
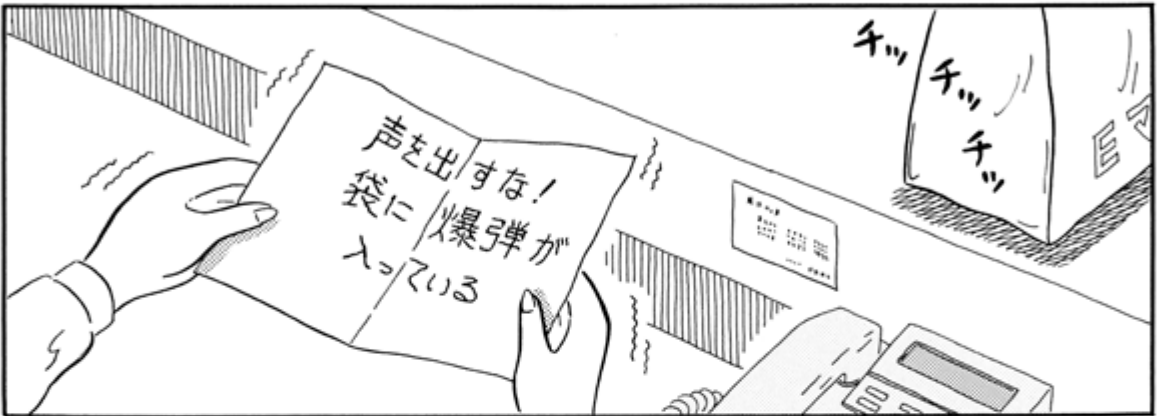
男「リストラが先か
クビが先かの
オレだって
あと数ヶ月の命だよ。」

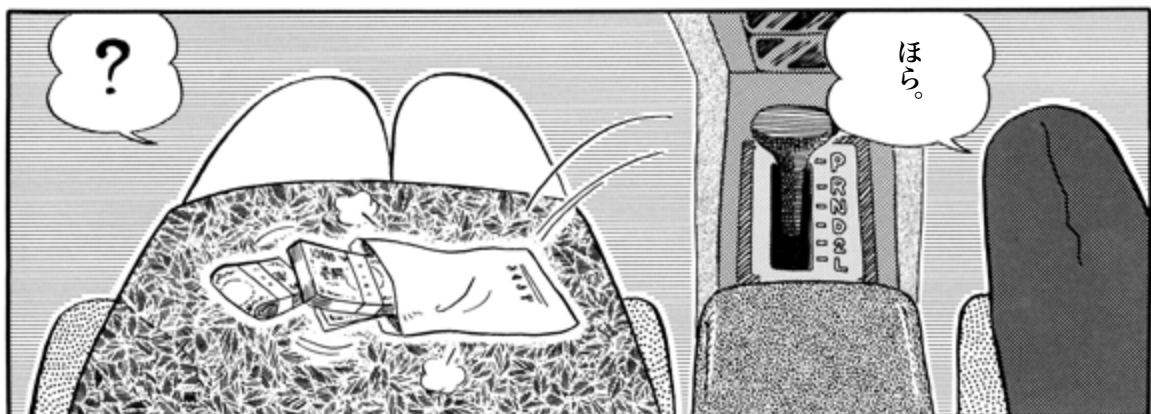
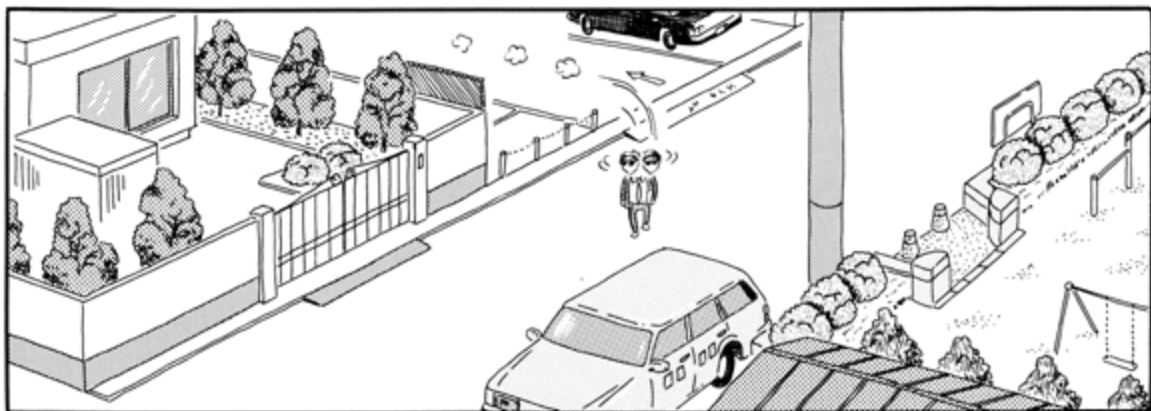
男「預金もないし
ヤケクソになってた、
それで好きな女と
死ぬんだったら
それもいいか。」

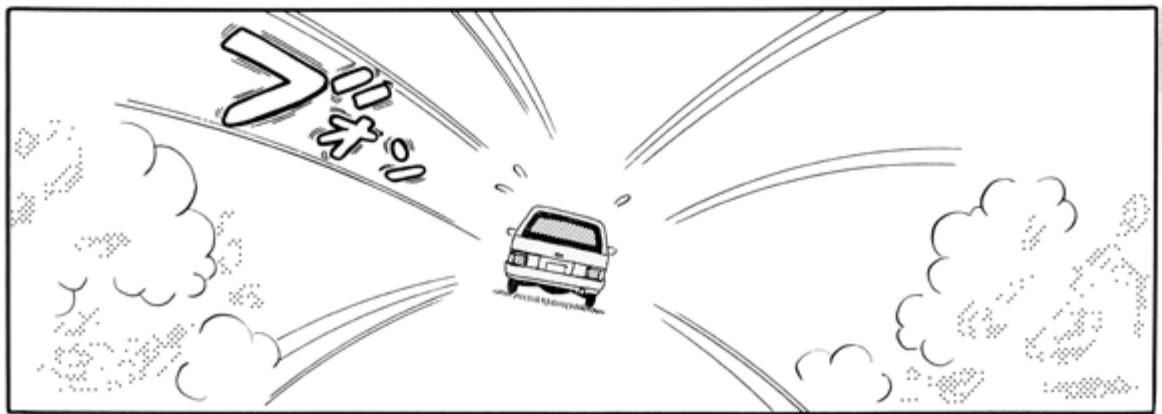
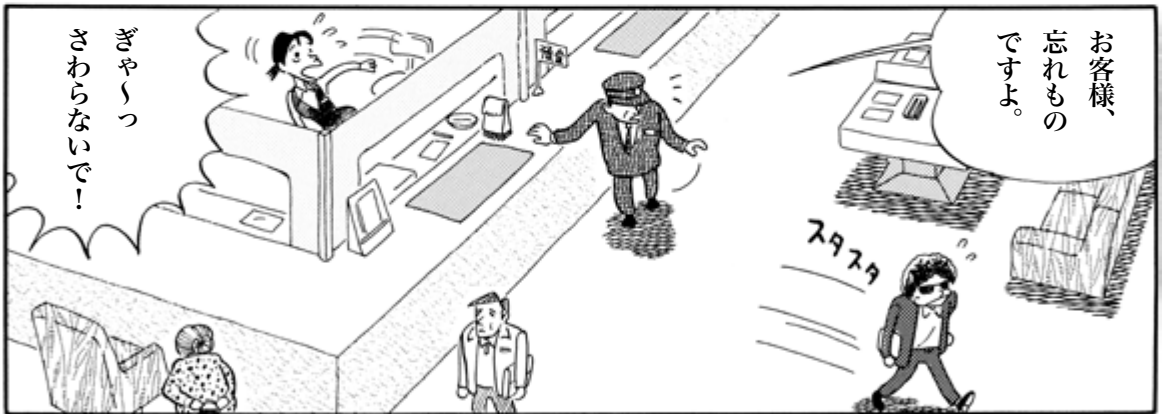
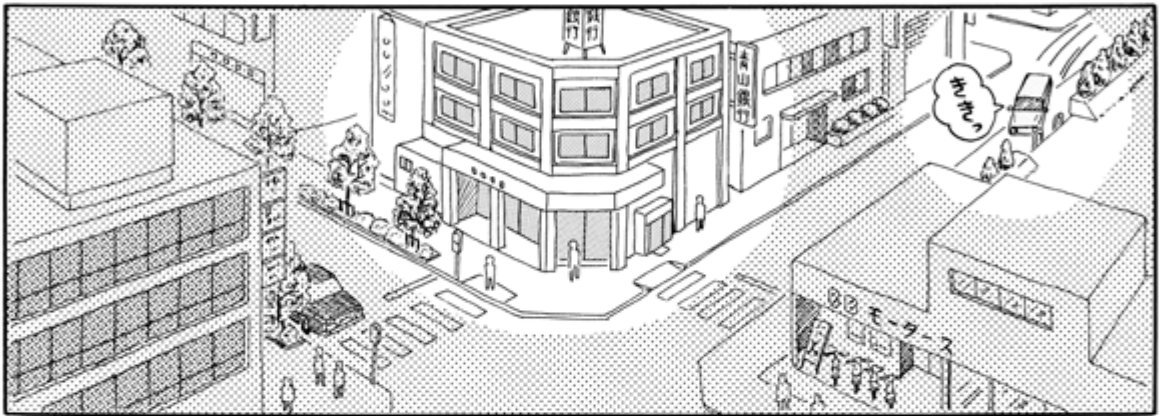
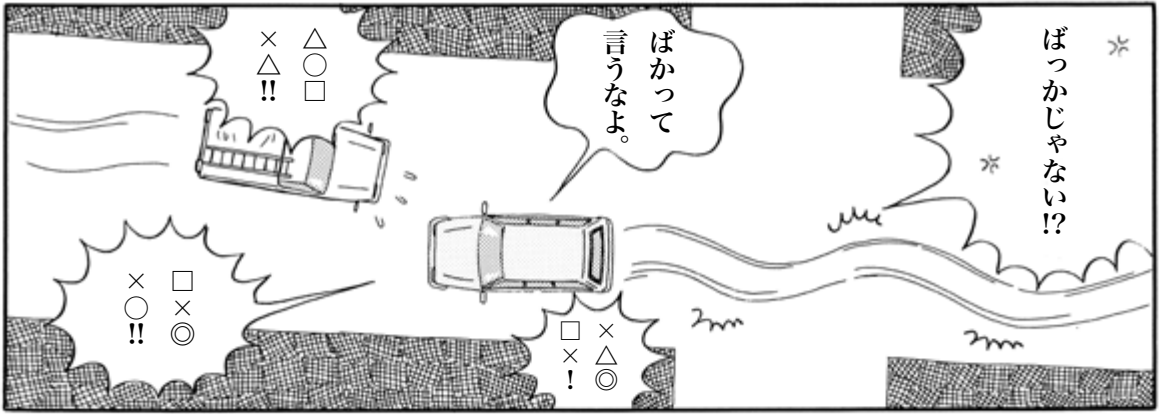


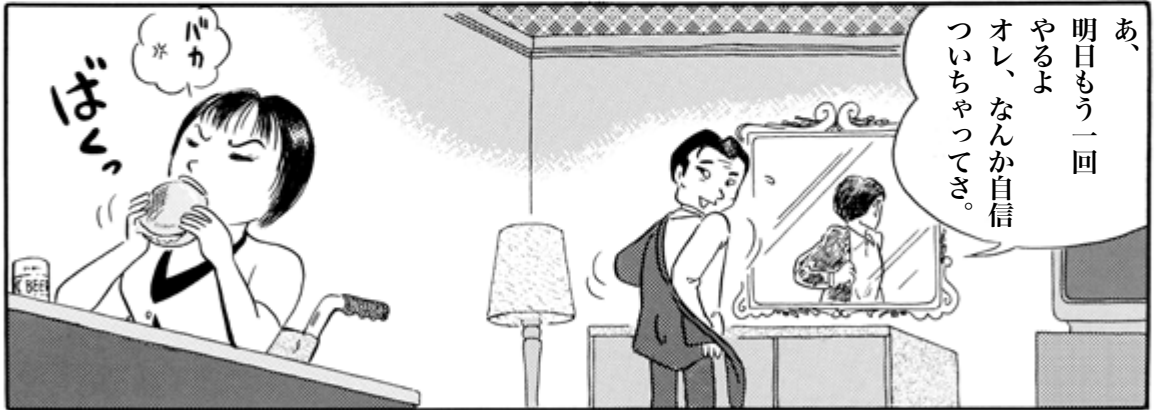
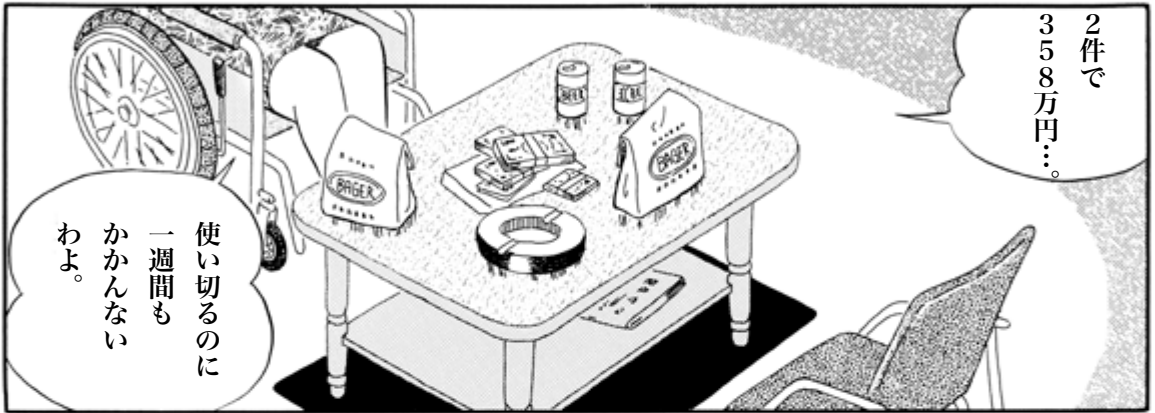
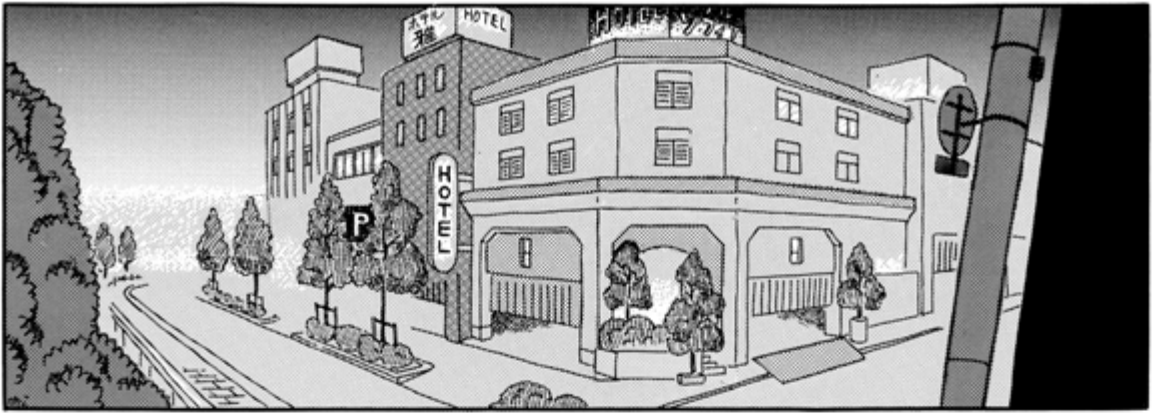


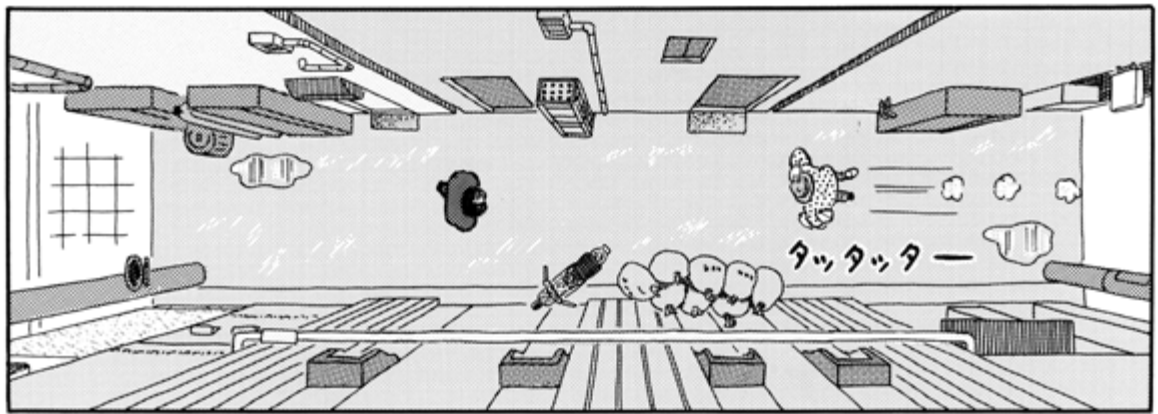
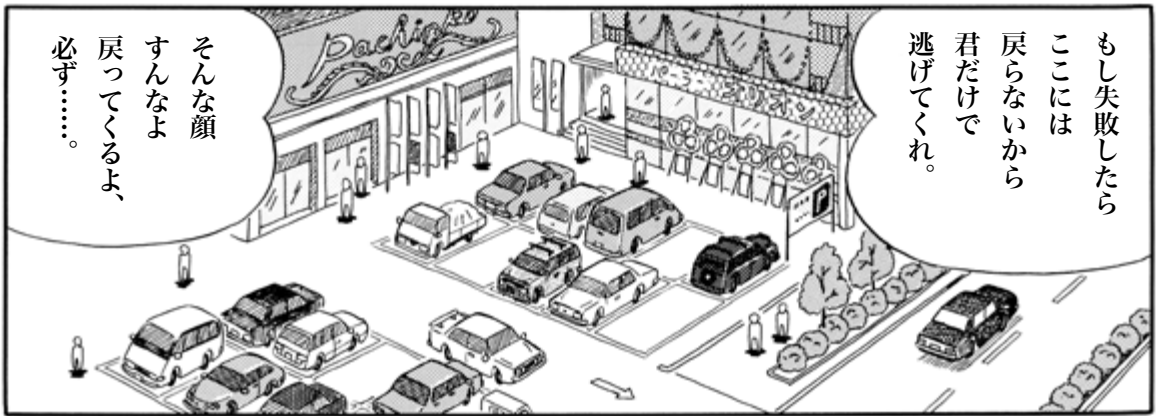
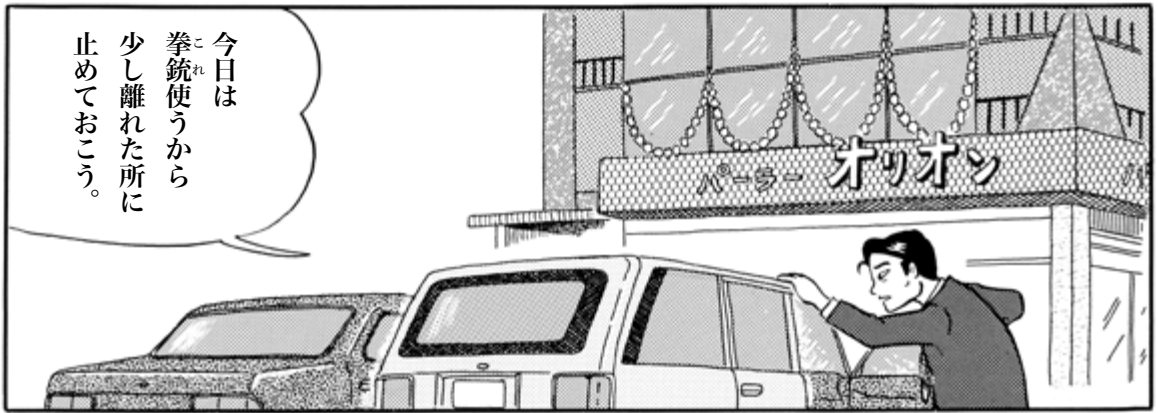


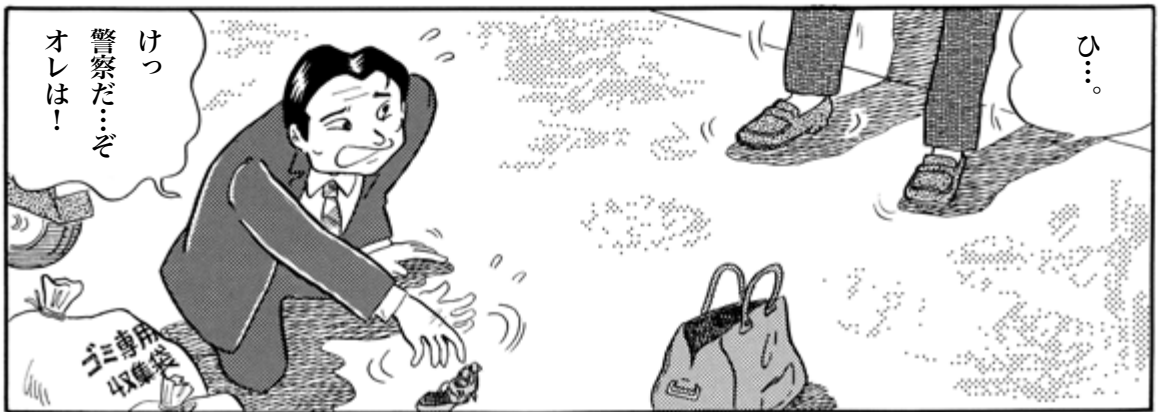
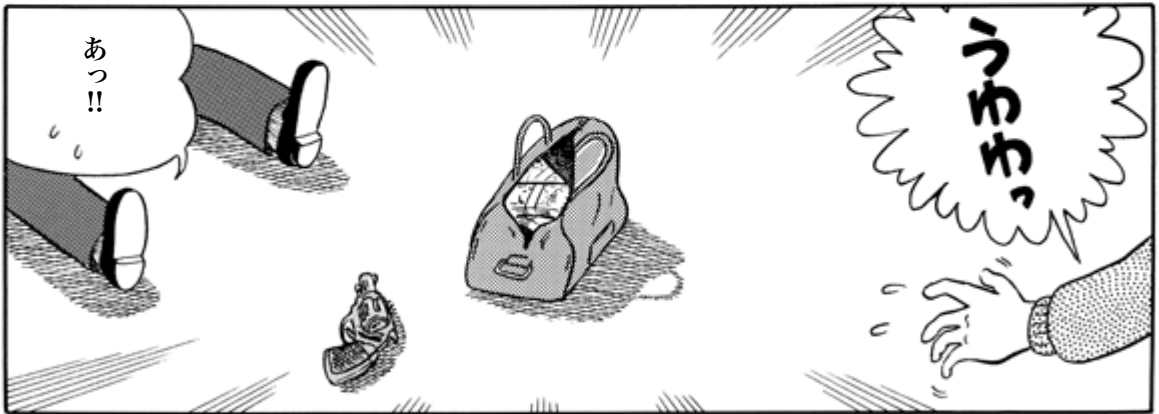
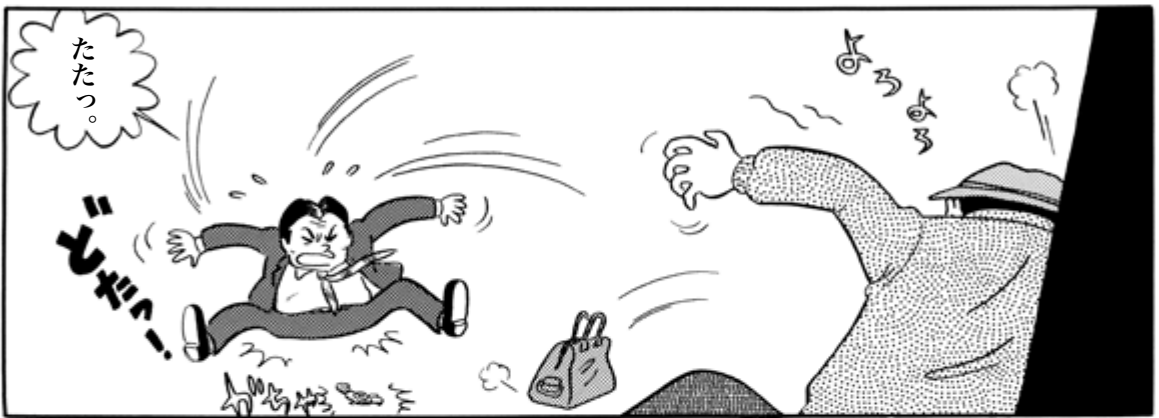


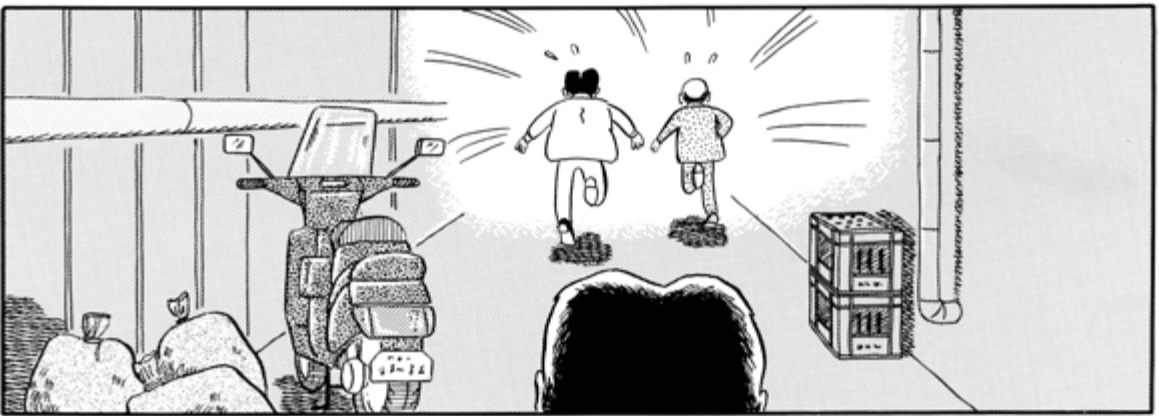
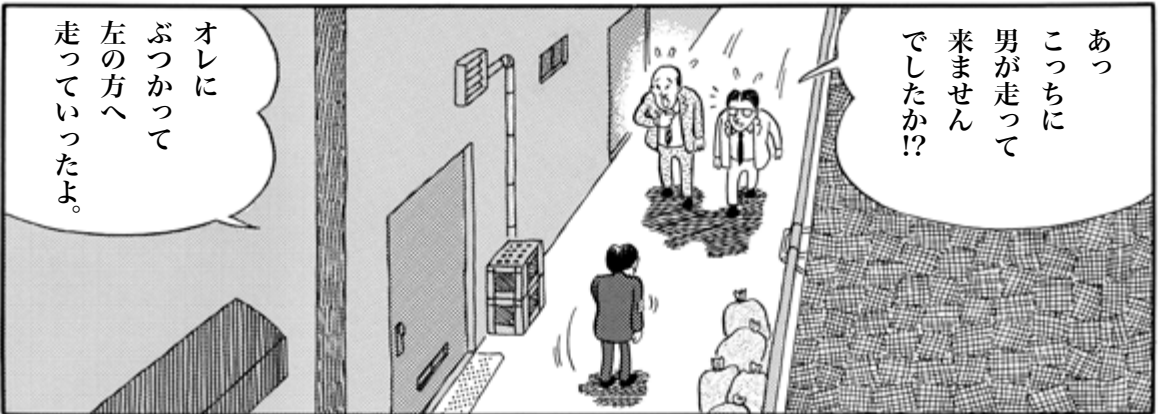
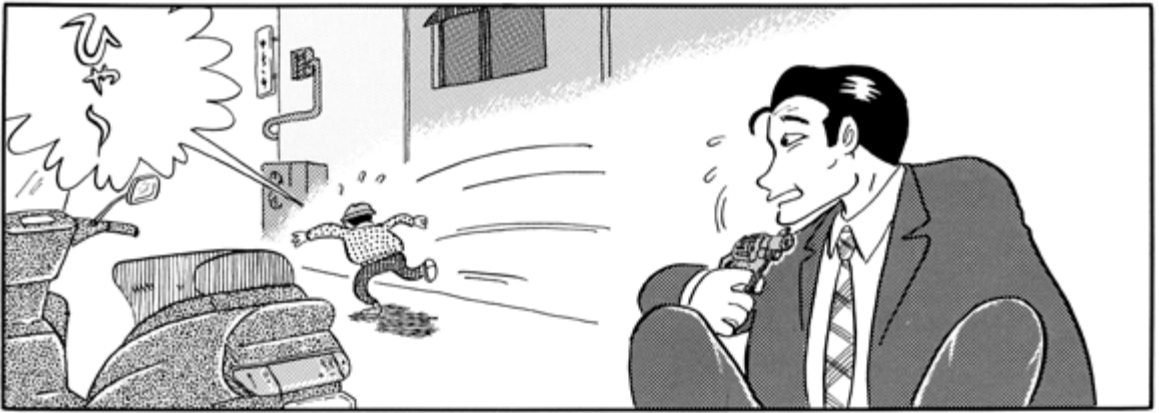


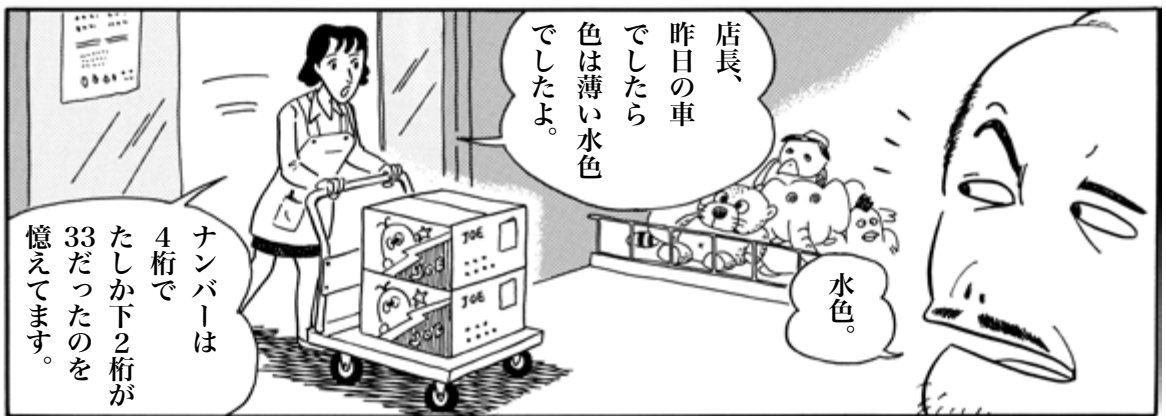
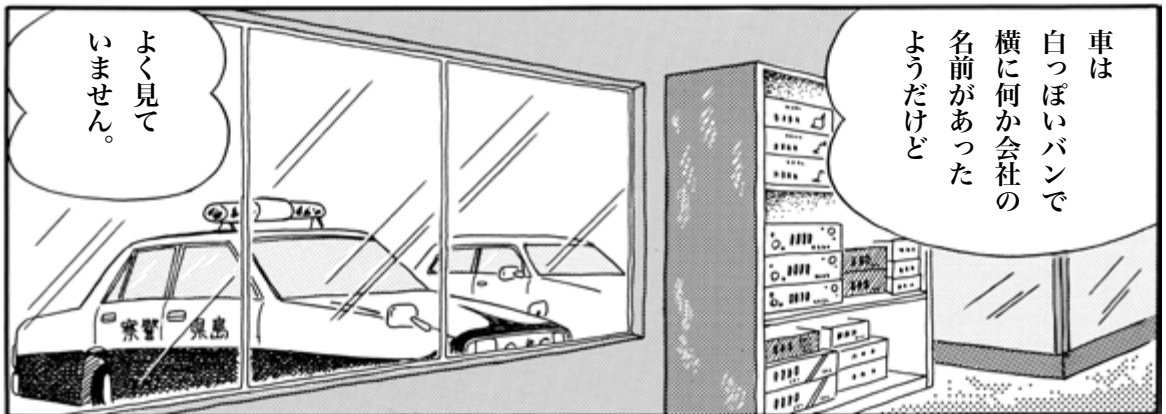
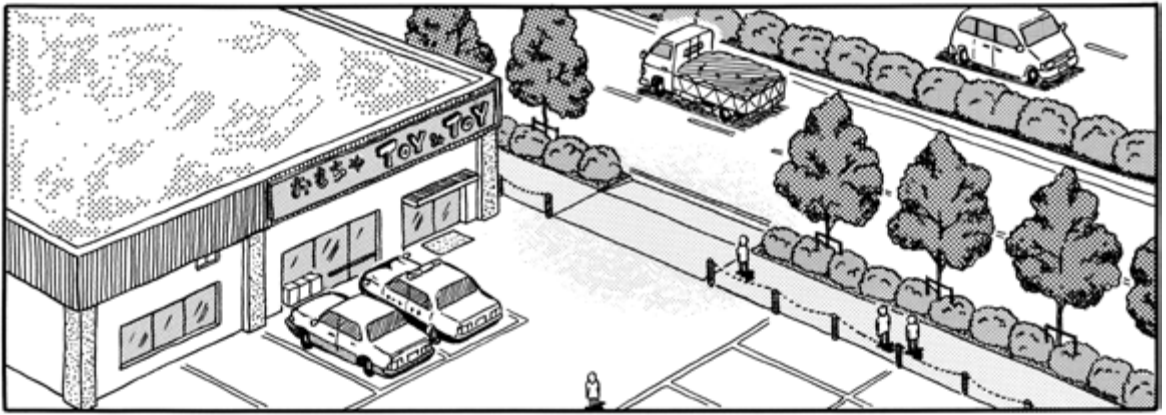


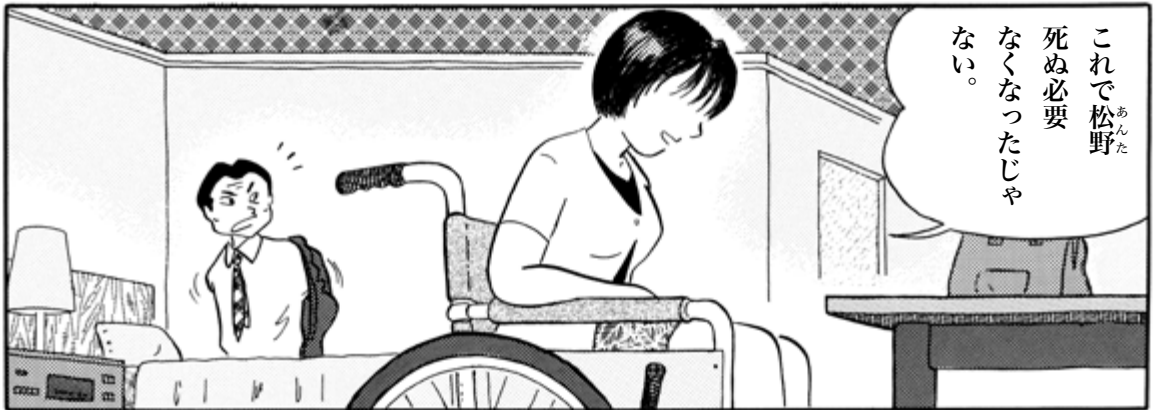
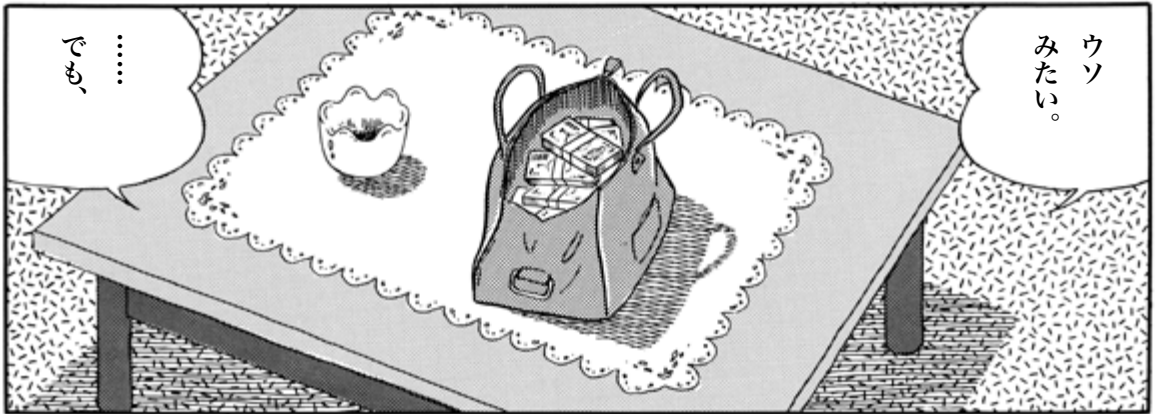
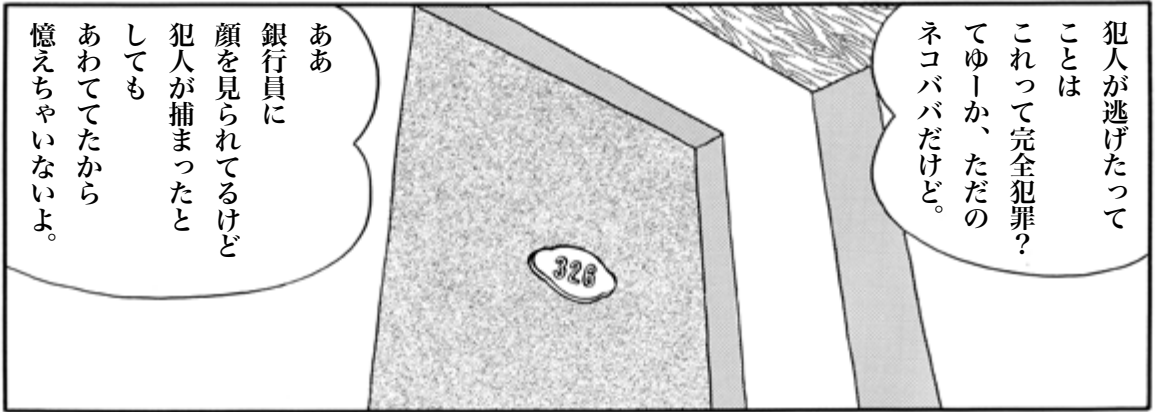
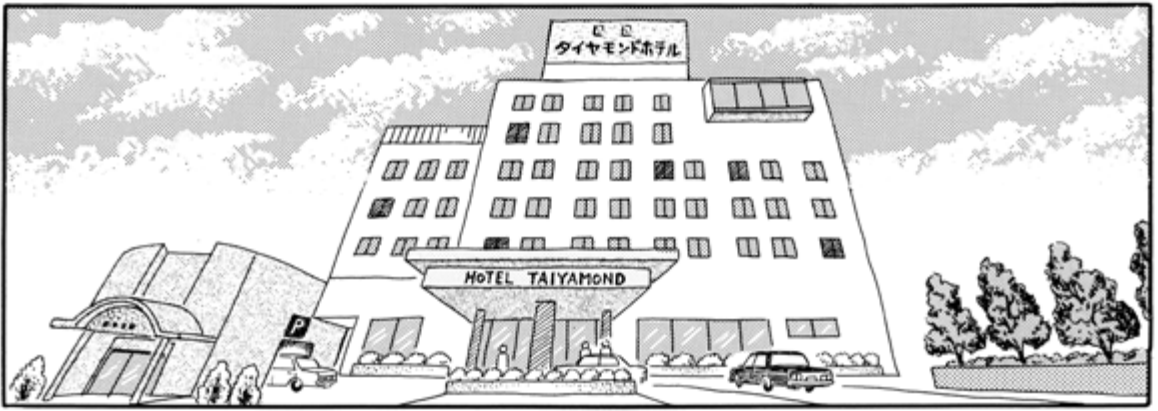


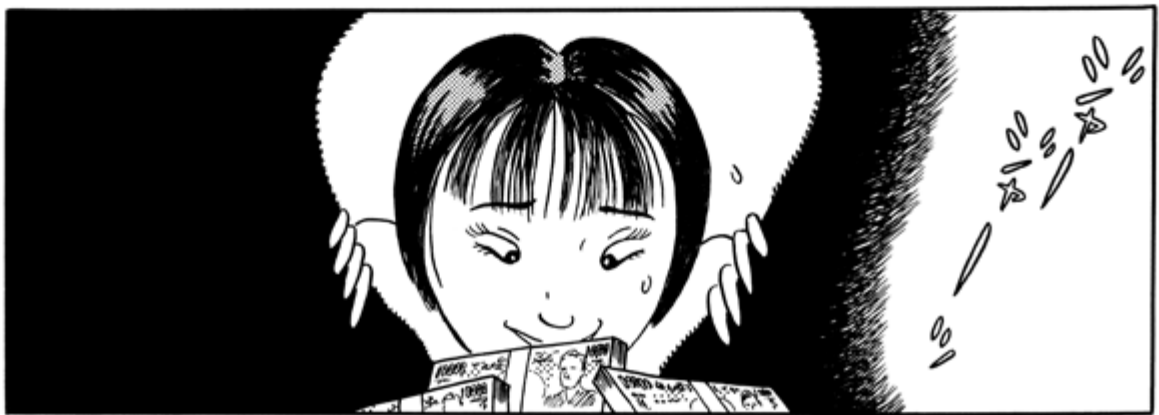
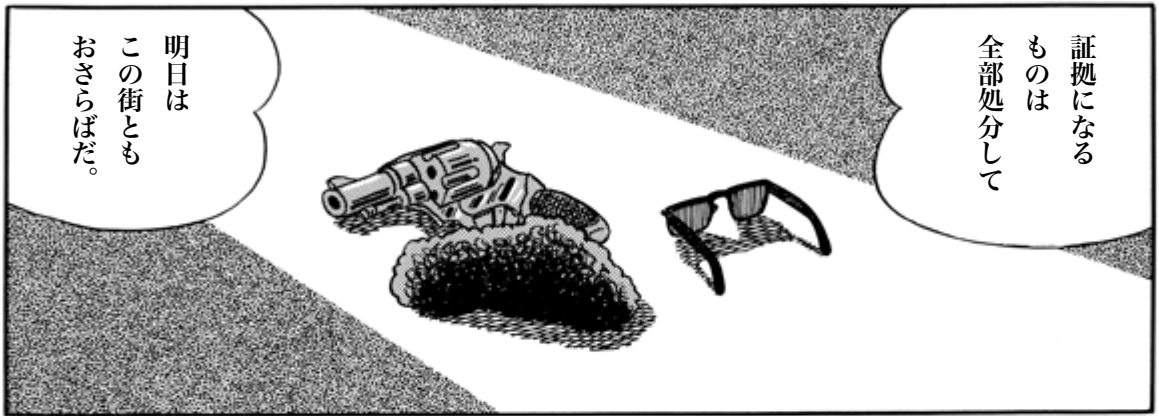


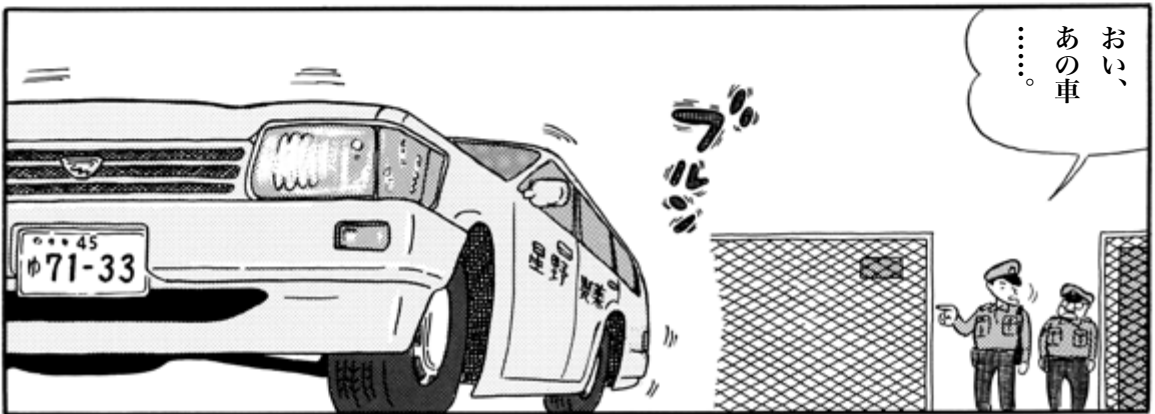
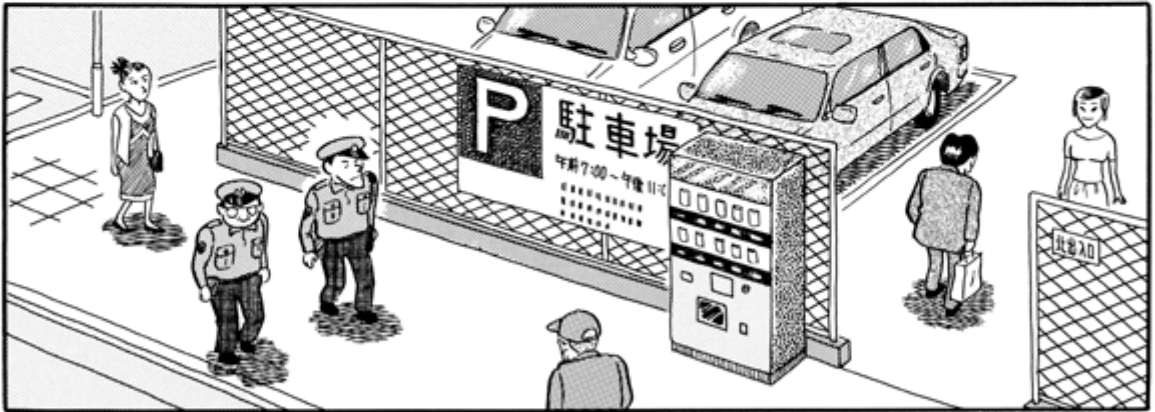


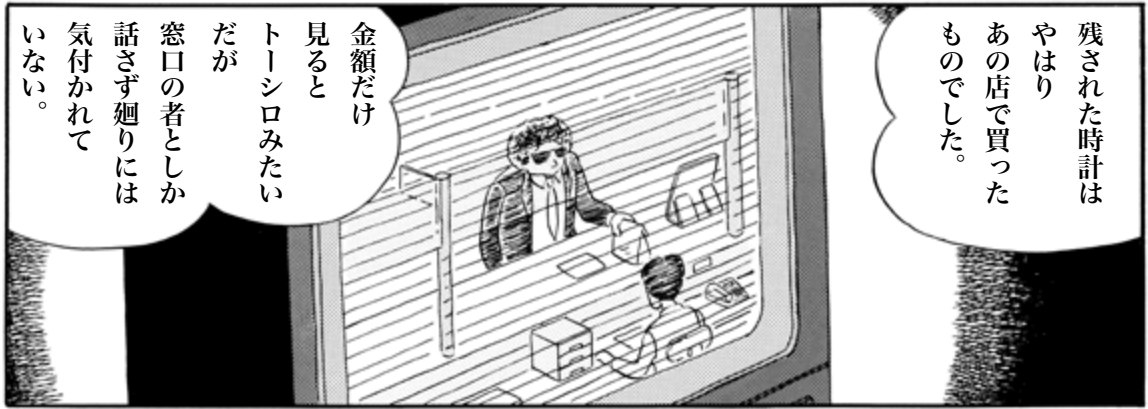












残された時計は
やはり
あの店で買った
ものでした。

金額だけ
見ると
トーションみたい
だが
窓口の者としてか
話さず廻りには
気付かれて
いない。



指紋も残さない
用心深さのわりに
最初の金額が
少ないせいかな。

午後だけで
2回もヤマを
踏むなんて
大した神経
してるよ。



どっちにしても
今朝の
五千万の
ヤマとは
別ですね。

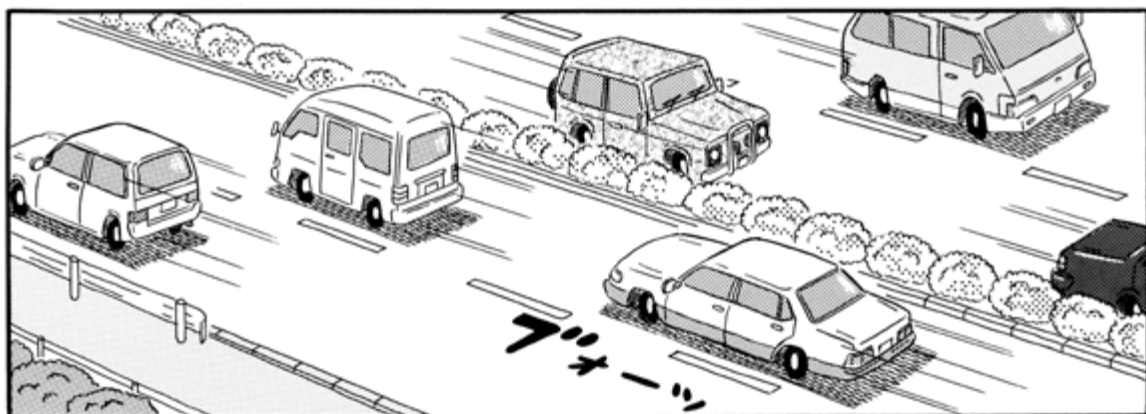
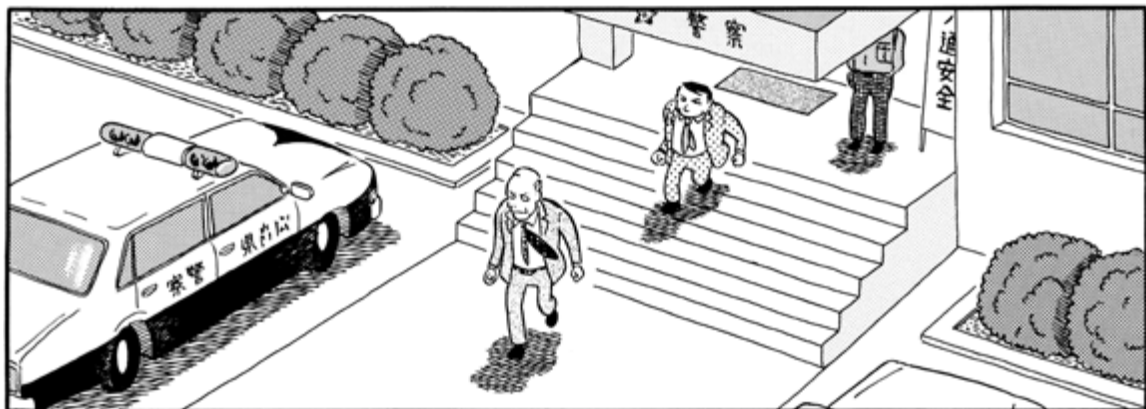
今朝の奴も
まだ捕まっ
てないそう
です。

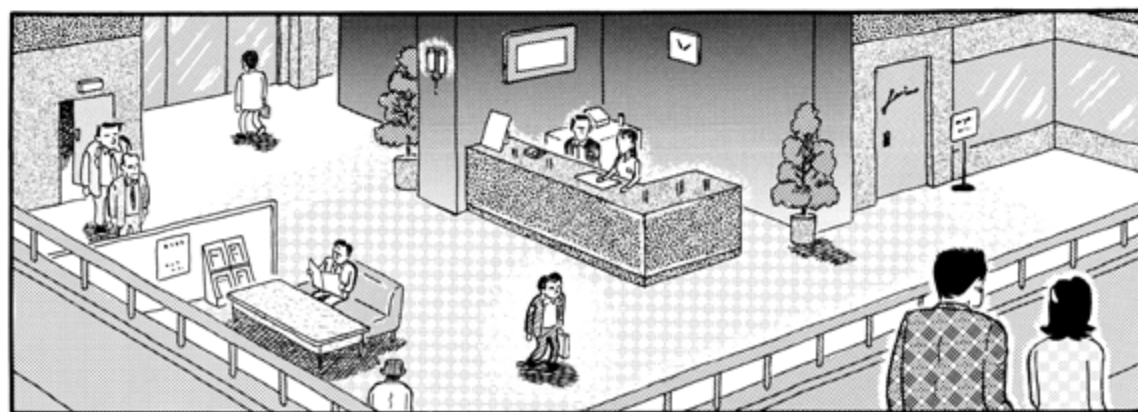
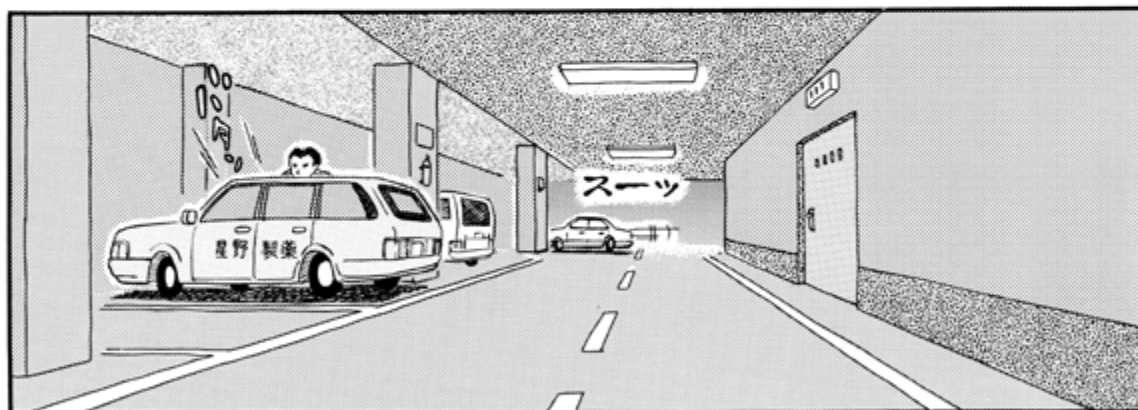
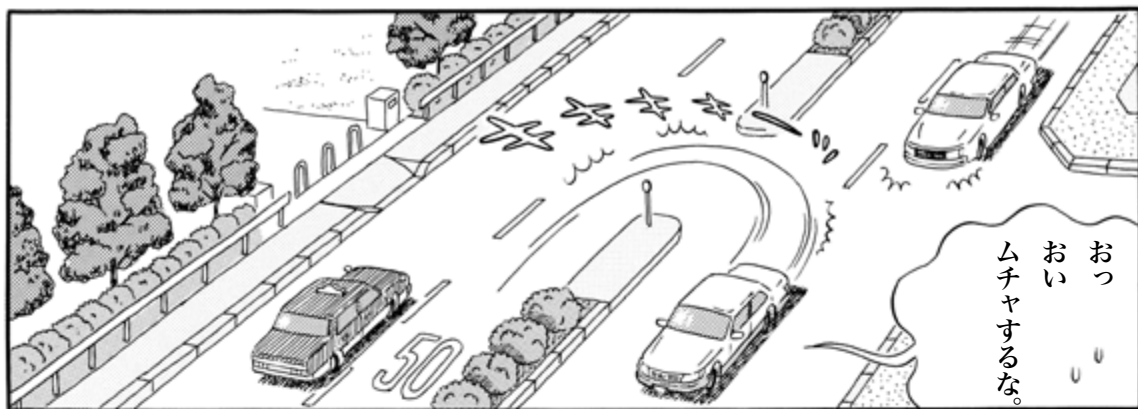


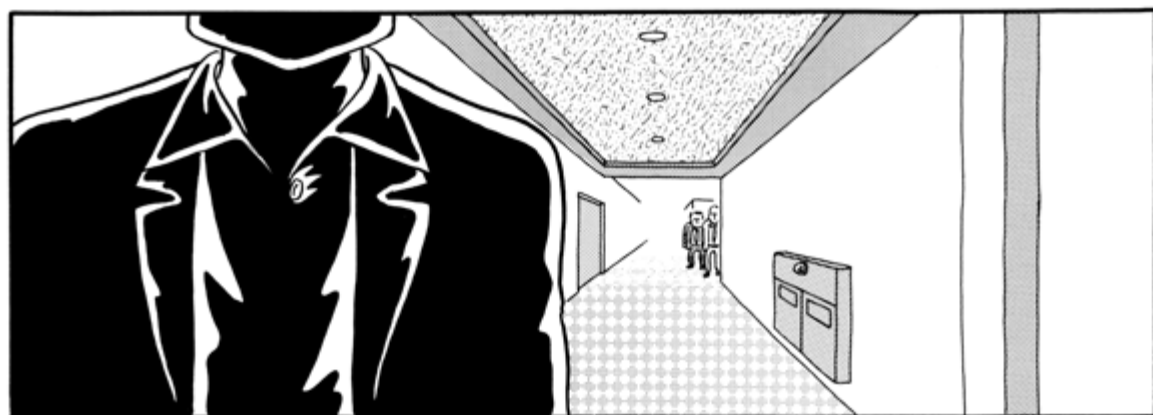
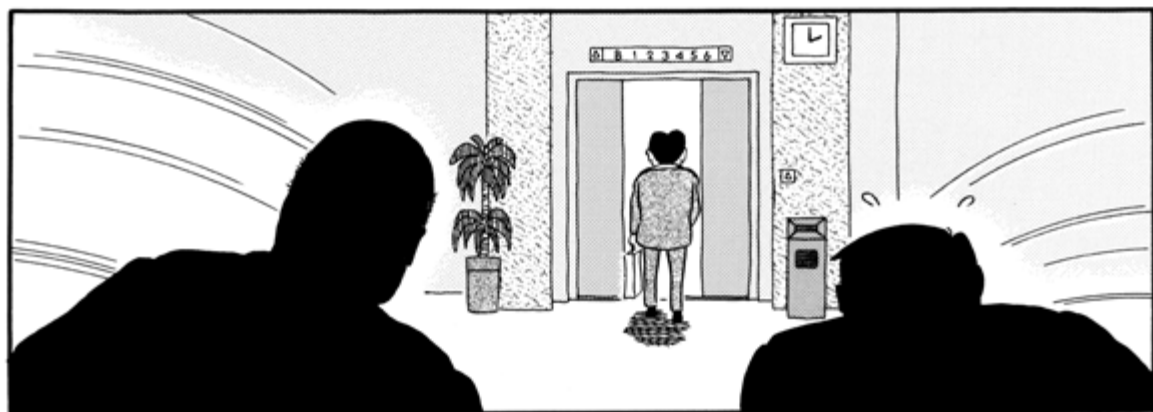
警部
手配中のものと
思われる車が
〇〇から××
方面へ向かっている
そうです。

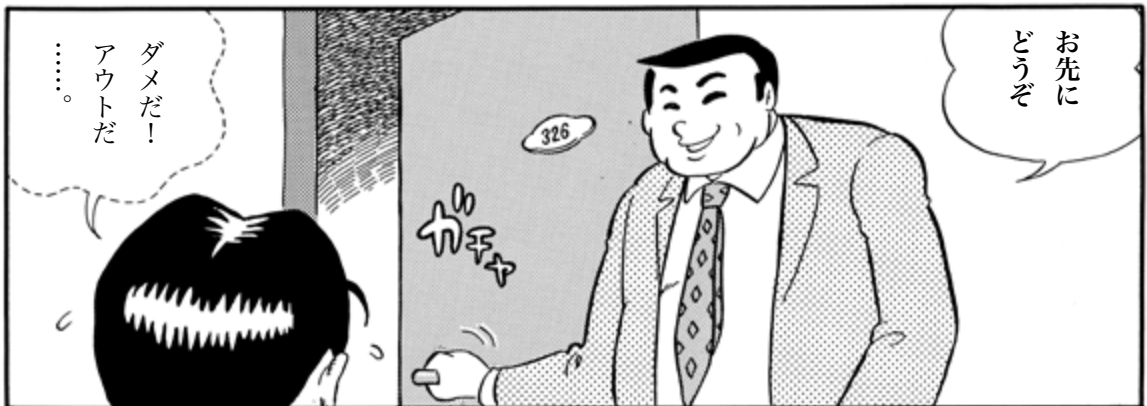
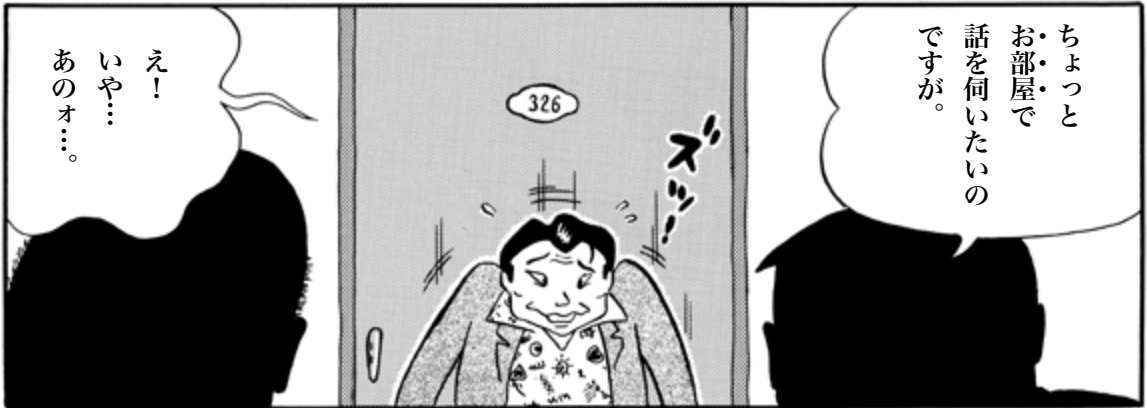
コーヒー
くらい
ゆっくり
飲ませろや

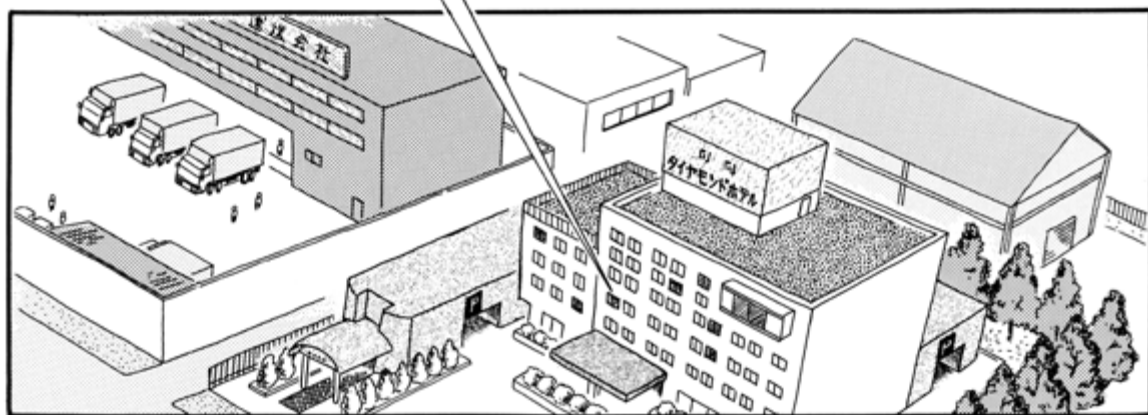
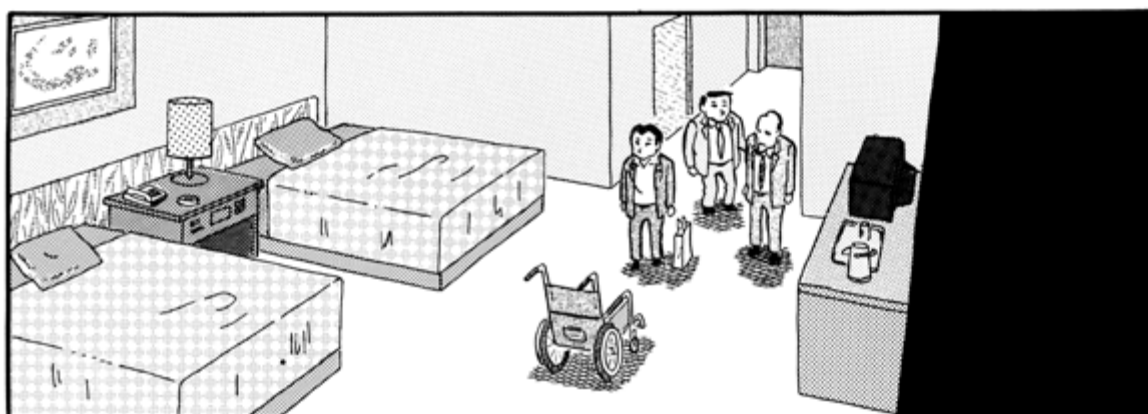
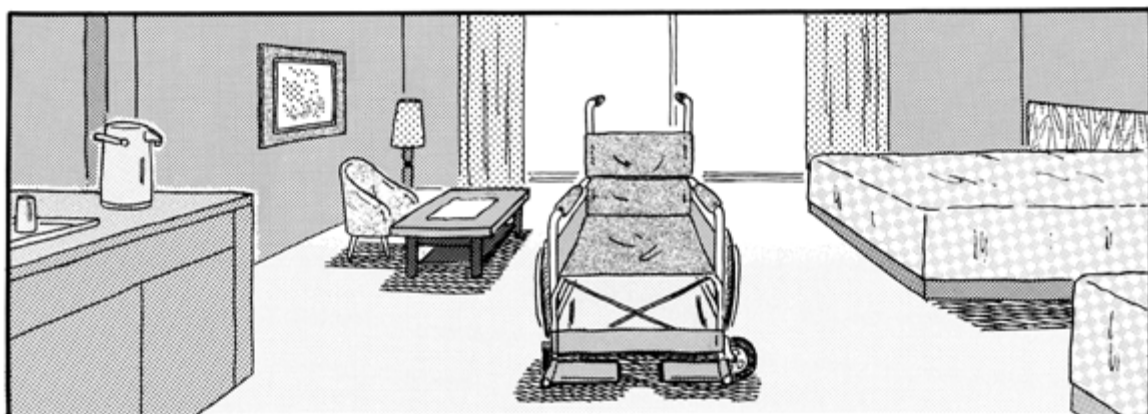
おい！
行くぞ。

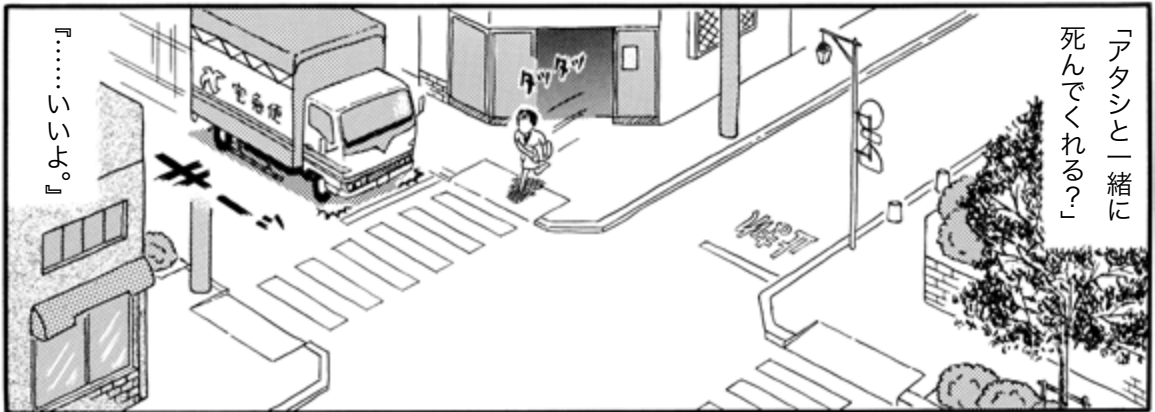
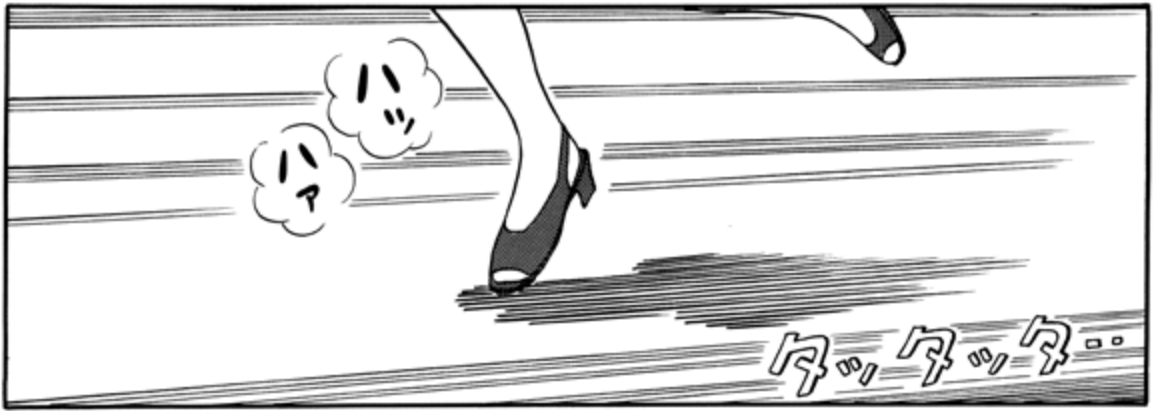


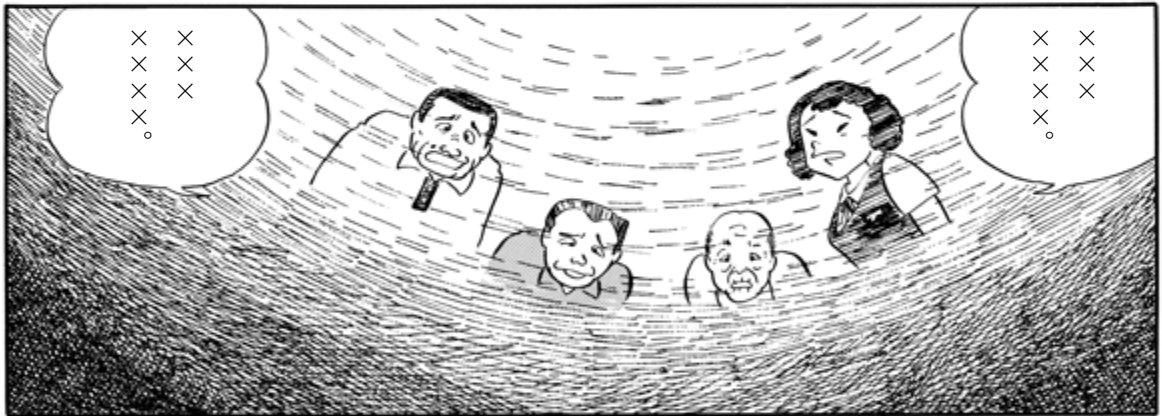
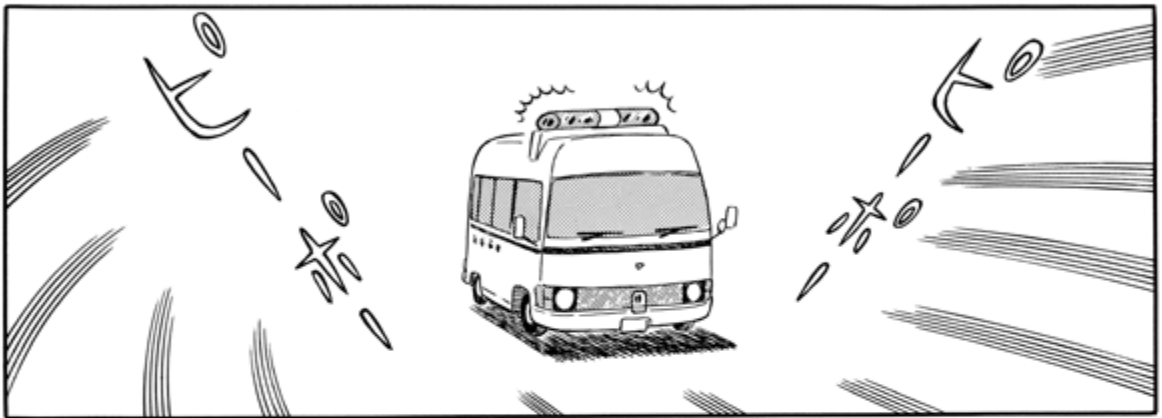
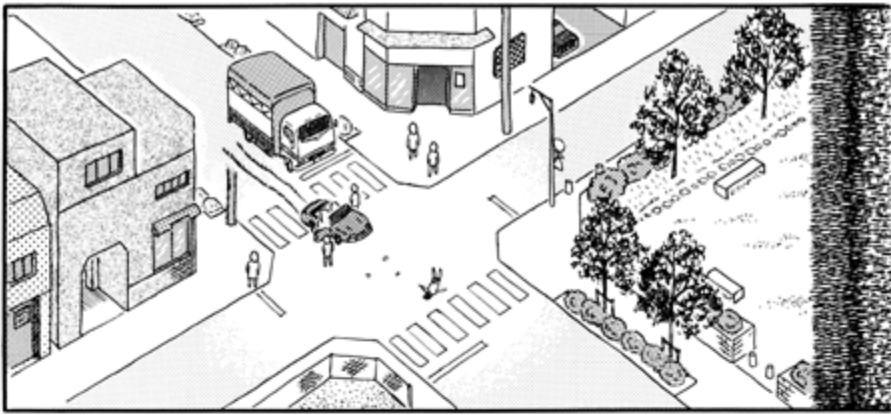


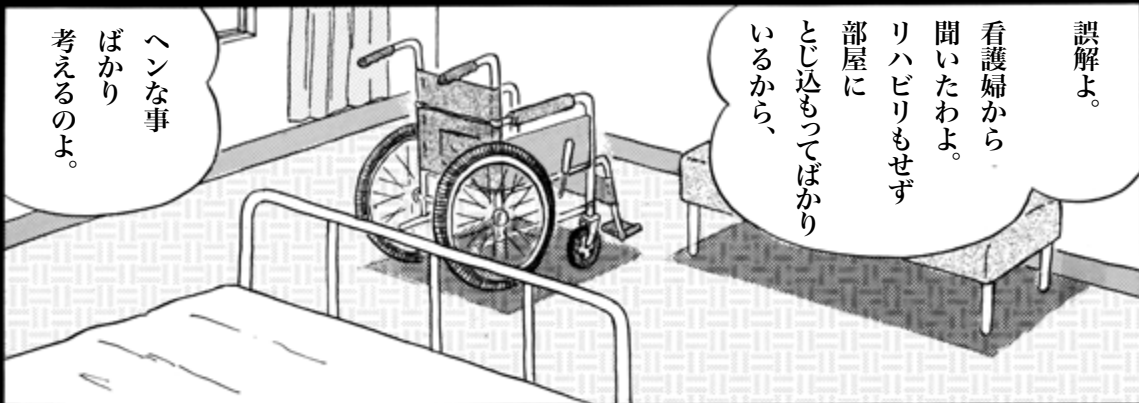












誤解よ。
看護婦から
聞いたわよ。
リハビリもせず
部屋に
とじ込めてばかり
いるから、

へんな事
ばかり
考えるのよ。



やめてよ！
よくも
平気な顔して
見舞いになんか
これるわね
このドロボウ猫！！



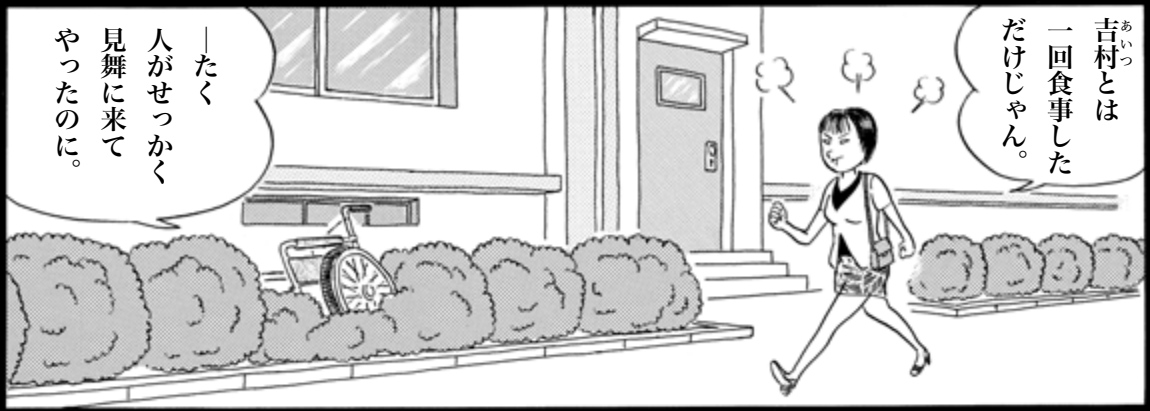
もう来ないよ！
こんなもんに
いつまでも
たよってないで
リハビリでも
しろよ！



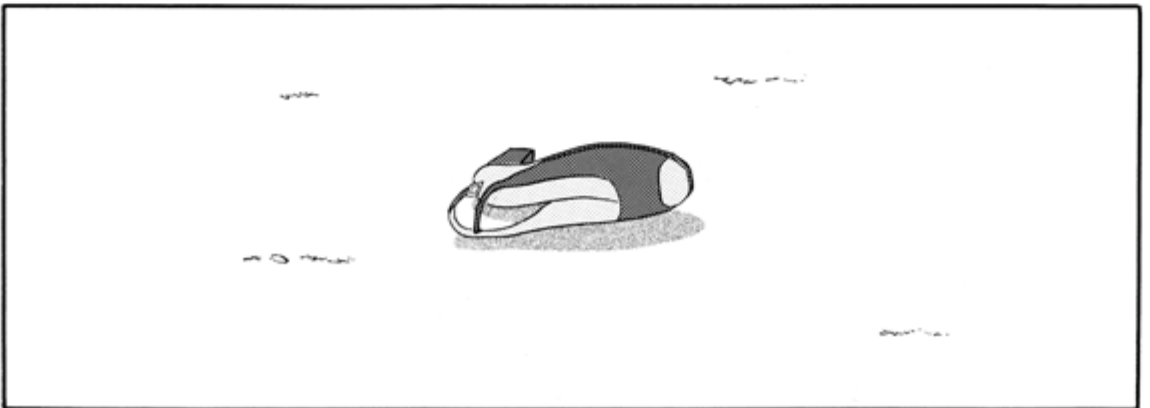
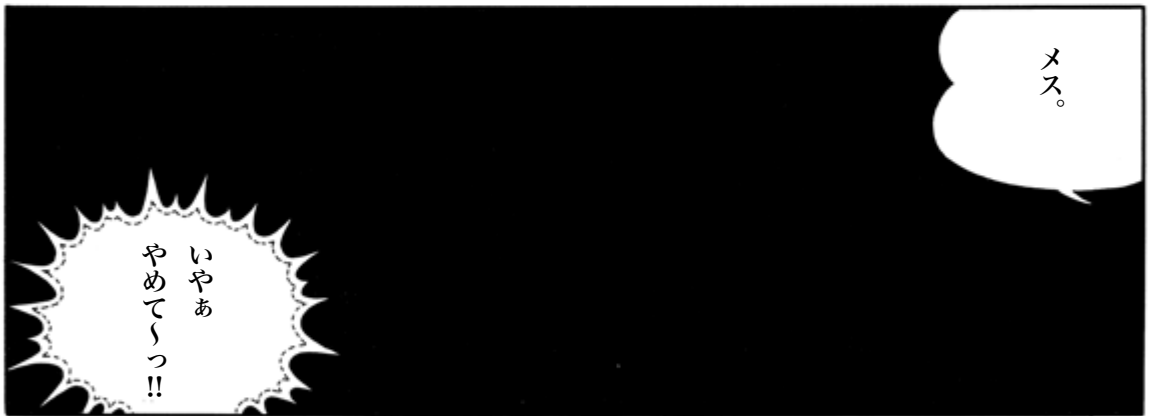
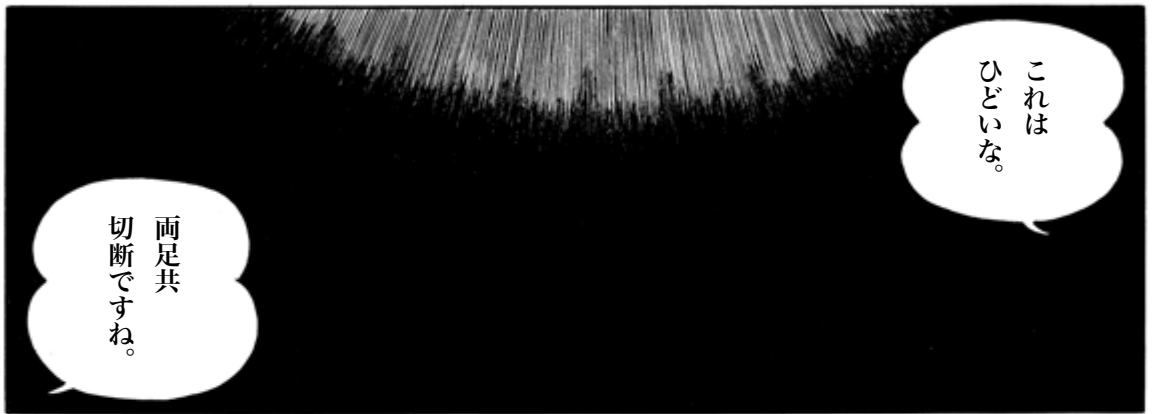
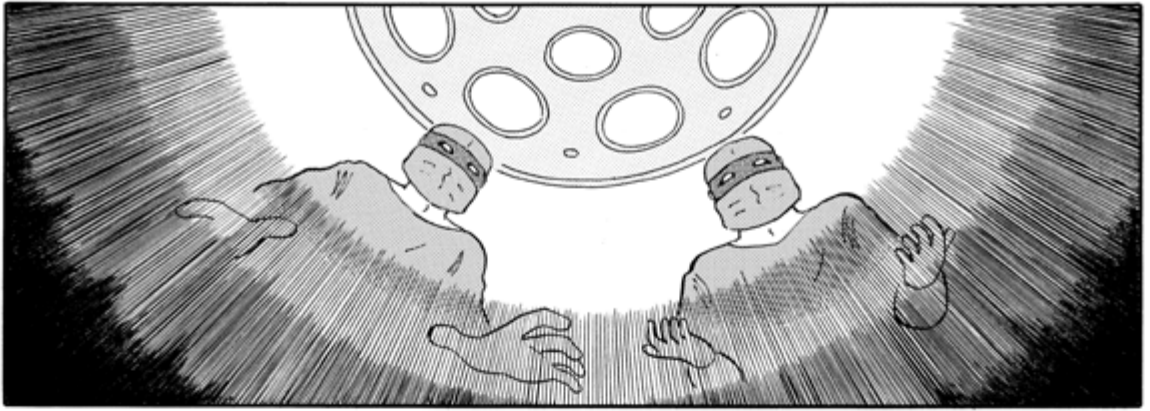
まあっ
なんてこと
してるの！
あーたは。

すぐに
とって
らっしゃい。

げっ！







昔の肉筆回覧誌【つれづれ草】は小包を開けると分厚くて綺麗な表紙にインクの匂いがまだするような、一応漫画家を目指していた私は初めて生の原稿を見て興奮しました。

一番びっくりしたのは大胆なホワイトの使い方でした。原稿って自分が思うよりキレイでなくても（修正部があっても）いいんだ、印刷したときにキレイであれば……なんて。

あの頃がつれづれ草の絶頂期だったのでしょうか、それを思うと新生1号に物足りなさはありませんでしたが、それでも編集部の皆様には敬意を表します。

長い間、自分の中では漫画を描くということを封印してきました。もちろんイベントとかでちょっとしたカットとかは描いていましたが。

十代で園田光慶氏に傾倒しハードボイルドにはまり、十代後半からはギャグ漫画に転向し（ストーリー物より早く描けるという単純な理由から）、それが佳作でジャンプに掲載され、周りからは『ジキルとハイド』と冷やかされました。（この頃は吉本新喜劇にはまっていたかな）

二十代で小説から完全犯罪に興味をもち、ブラックギャグからまたストーリー物に戻り、ある事件をきっかけに筆を置いていました。

小説や漫画を書くつもりはありませんでしたが、簡単なストーリーやアイデアは、なぜか書き留めてはいました。

五十代にもなり今更ですが、漫画はメリハリをつけるために奇抜なコマワリをしているがテレビや映画は同じ大きさの画面を観ています。

『漫画でストーリー物が同じコマワリだったらどうなんだろう。』

という極めて単純な発想がこの作品が生まれたきっかけです。

絵柄はストーリー物とギャグマンガを融合させた、いわゆる昔ながらのマンガマンガした絵になったと思います。

2009.5.25 福田達雄

